

飛鳥資料館の開館展示

飛鳥資料館学芸室

1974年3月16日、飛鳥資料館が開館した。観覧者数は、開館当日1618人、3月30日までで計9655人。幸先のよいスタートといえよう。これに先立って3月15日、開館式・特別公開をおこない、400人の招待客をむかえて祝福をうけた。

1973年4月、資料館が発足すると、学芸室・庶務室は、春日野庁舎に準備室をもうけて、活動を開始した。学芸室では、文化庁の国立飛鳥資料館（仮称）設置準備会議がまとめた展示計画（1972年2月）の基本方針を尊重して、展示方法とを検討し、所内の準備委員会の討議を経て、その原案を作成した。これによって、日本エキジビション企画プロダクション（代表国友俊太郎氏）が作った展示設計原案を、さらに準備委員会で煮つめることによって、大筋が決定、1974年12月に、同プロダクションに工事請負を依頼した。

資料館には、常設展示用の第1展示室（390㎡）と、特別展示用の第2展示室（66㎡）がある。6月8日までの、開館記念特別展示期間中は、第1展示室も、高松塚古墳壁画の模写などによって、とくに充実し、また第2展示室では、ガンダーラ以来の仏像を中心として、特別展示「仏教伝来——飛鳥への道」を開催することにした。展示品・展示状況の詳細は、右頁の平面図、および開館にさいして出版した2種のカatalog、『飛鳥資料館案内』、『仏教伝来——飛鳥への道』にゆずる。なお、資料館の設立・建築・工事については、前年度年報の報告のほか、パンフレット『奈良国立文化財研究所飛鳥資料館』を参照されたい。以下、展示にかんする方針のうち、記録にのこっていない点を若干かかげておく。

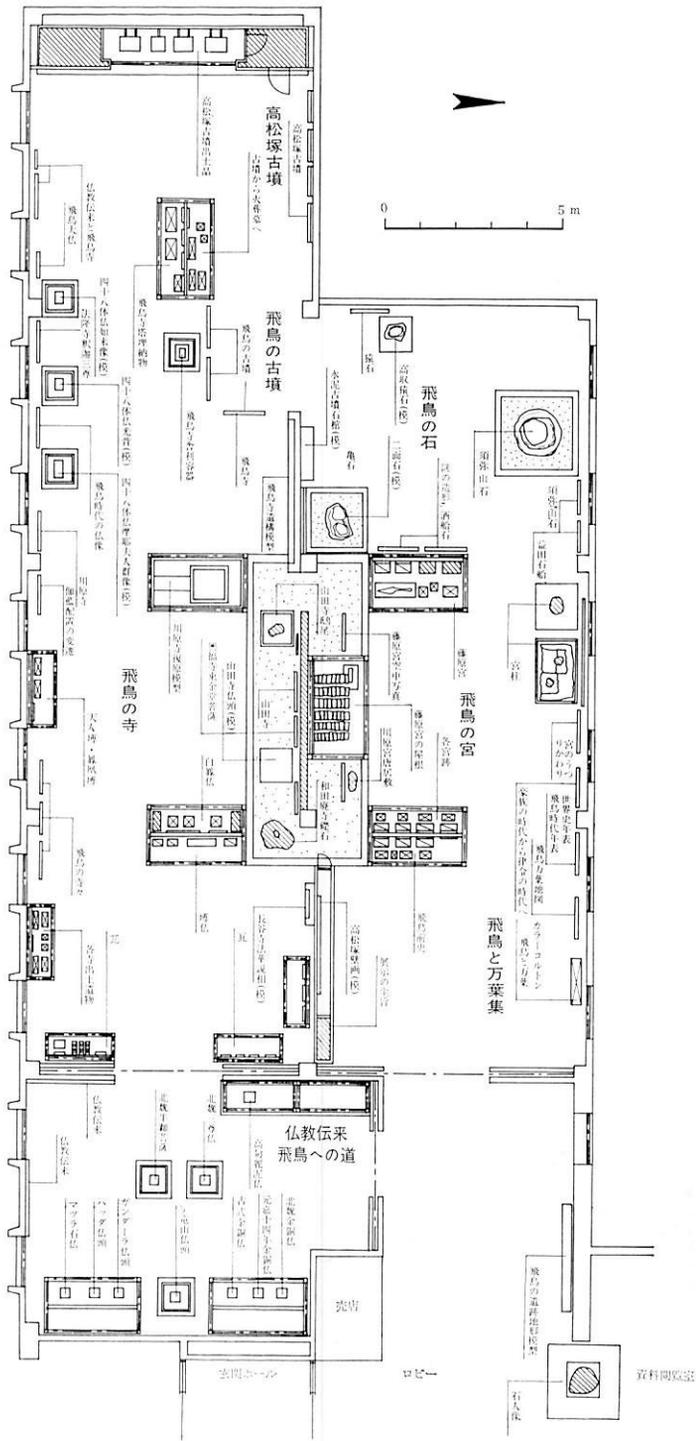
陳列ケースは、両面・片面両用のものを、大・中・小3種類作成した。移動しないことを前提として作り、また、鍵が外面からみえない構造とした。高松塚古墳出土品用のケースは、やや豪華で、かつ閉館のさいに、ケース前面を鉄扉で閉ざす構造の、作りつけのものとした。

展示室内の採光は、人工光線によるものとしたが、同時に、窓を完全に閉ざすことなく、時には開けられる状況にとどめることにした。したがって、陳列ケースは、窓と窓の間、あるいは、窓から遠く離して配列することになり、展示室の中央に、大ケース4個をオーソドックスに相称的にならべた。展示室西北隅のブロックは、とくに重量に耐える構造になっており、石造物の展示場所は、おのずからこのブロックに限られることになった。また、高松塚古墳出土品用の作りつけケースは、展示室西南の奥まったブロックの西端におくことにした。このようにして、第1展示室の基本的な導線が決定したのである。

展示品を見やすくするため、しばしば斜面・垂直面への固定法を採用した。また展示品の意義をわかりやすくするため、随時、展示品を写真・図とくみあわせることにした。

解説文は、各項200字以内を原則とし、教育漢字以外には、ふり仮名をつけた。また「出土した」と書かず「みつかった」とするなど、やさしい言葉をえらぶようつとめた。（佐原 眞）

飛鳥資料館の開館展示



第1図 飛鳥資料館の展示状況